『節用集』寛永六年刊本類の本文系統

佐藤貴裕

はじめに

上田・橋本（一九一六）によれば「寛永から延宝に至る五六十年の間に、新に出版せられた節用集」が、本文系統の同不同を判断する指標である「所収の語の順序まで、慶長十六年本には一致せずして、草書本の特徴を具へて居る」（第六章）という。しかし、寿閑本から慶長一六年本が派生したことが確認されるなど（高梨信博一九八四・一九九二、佐藤二〇〇八）、この系統も軽視できない。もちろん、草書本も寿閑本も易林本を祖とするので、収載語の異同に注目するだけなら二系統に分ける意味は小さい。が、記述的研究では、実際の諸本間の関係を再構するので、より正確な系統の検討が必要になるのである。そこで草書本と寿閑本の二系統を明確に分かったうえで、近世初期諸本を位置づける試みをしてみたい。その一環として、本稿では『節用集』寛永六年刊本類とした次の諸本を検討する。

『節用集』寛永六年刊本　　中野市右衛門開版　二巻本　一面五行　東京女子大学蔵
『節用集』寛永一二年刊本　　中野市右衛門開版　三巻本　一面五行　亀田文庫・京都府立総合資料館蔵
『節用集』寛永年間刊本（零本）　開版者不詳　　四巻か　一面六行　亀田文庫蔵

これらは、美濃判縦本・真草二行体・平仮名付訓など近世節用集の典型をそなえるが、その本文は寿閑本系の慶長一六年本を基調としたうえで、草書本系の横本などからの摂取も認められるものである。その意義は、寿閑本系の存在を補強しつつ、草書本系との交雑を証するものとなる。本稿ではそうしたことの具体相をかいまみようと思う。

本稿にかかわる先行論文に柏原司郎（一九七七）がある。寛永一二年本・寛永年間本はじめ、寛永期節用集における収載語・配列順・表記を中心に諸事実が指摘されている。ただ、現象の解釈では本稿と一致しないことがままあり、それは寛永六年本が未見であることや立脚点の異なりによる。たとえば寛永六年本（柏原では未見のため寛永一二年本）

については、本稿は慶長一六年本と草書本系横本の交雑とみるが、柏原では諸本の出現様態を主として派生によって解釈するので、慶長一六年本と寛永一二年本の特徴をあわせもつ祖本を仮構し、それからの派生を考えるのである。未知の書を想定した慎重な行き方なのだが、一方では開版書の特徴を汲んでもよいと思う。寿閑本から慶長一六年本への派生では透き写しなどが想定され（佐藤二〇〇八）、『元亨釈書』寛永元年版では五山版からの覆せ彫りを刊行者自身が告げるという（和田恭幸二〇〇一）。そのような、容易に他のテキストを取り込みうる技法が近世初期から認められることも考慮に入れて、草書本・寿閑本の二系統を特立した記述的研究を試みたいのである。

諸本概観

寛永六年刊本　本書は鳥居・酒井（一九九六）「東京女子大学図書館所蔵近世和本目録」に紹介されるものである。亀田文庫等の所蔵する寛永一二年刊本と同版であり、年次や摺りの状況から初版本と思われる。受け入れ印に「昭和6年11月5日」とあるが、これまで検討されることがなかった。書誌学的な方面からもなぜか注目されず、鳥居・酒井以降におおやけにされた寛永版本・中野家本の目録類でも記載されないのが常態である。

内容について、亀田文庫蔵寛永一二年本の亀田次郎の識語に「其本文が只其振仮名の平仮名となれると以外は全部慶長本（慶長一六年本――佐藤注）と内容に於て同一なりとす」とあるのが同版の寛永六年本にもあてはまるはずだが、当たらない。語の削除や配列順の変更もあり、後半部では特に草書本系横本の影響が見られるからである。

辞書としての完成度にも疑問がある。慶長一六年本の一面四行構成を縮約して五行にしようとした意図は分かるが、字の中心線がそろわぬ行も散見され、見出し語間の境界の空白も一定しない。ほぼ皆無から三字分におよぶものなどまちまちで、「凡　河内　躬恒」（ヲ人倫）とするものまであり、語の切れめに対する意識・配慮が浅い。語の重出も多く、ハ言辞「晴敷」のように同一行に連続する例すらある。付訓の誤脱は少なめだが、濁点の欠落は多い。同字符の使用原則も一定しないことがある。本文後半では割行表示を積極的に取り入れてもいる。このように、本文系統はともかく、寿閑本・慶長一六年本の整備された姿からは想像しづらい不備が散見されるのである。

とまれ寛永六年本が現れたことは意義深い。これまでは寛永一二年本によるほかなく、その本文系統を考えるのに寛永七年刊本や『二体節用集』寛永九年刊本を考慮する必要があった。が、それらは今後は一応考慮から外すことができるのであり、極端な場合には、それらの諸本が夾雑物として排除されるべきこともあるかもしれない。

寛永一二年刊本　寛永六年本の版木を再利用した、いわゆる同版であるが、三巻構成に改められている。

まず、一二年本の中・下巻は、六年本の上巻六五丁・下巻三二丁以下をあてる。丁表一行めに「曽（幾）　節用集巻中（下）」と陰刻するが、この一行を捻出するために語・注を削除する。ただし、当該丁表だけで調整を済ませており、丁裏以降は元のままである。なお、柱題は「節用集中（下）」とし、丁付けも一からに改めている。

六年本の上・下巻の境界は一二年本の中巻に解消された。まず六年本上巻末丁表の五〇語ほどと、丁裏のイロハ・門名一覧（陰刻）を廃する。[1] 六年本下巻初丁の一行めに「屋　節用集巻下」、二行め以降にヤ部乾坤門がくるが、この二行を一二年本では埋め木し、一行めに六年本上巻末丁表から「群役・覆・寉・繰・件・配・絡・飯・摧・苦・眉」を拾い、二行めの「ー（夜）中・ー（夜）」を削除して部名表示を移し、ヤ乾坤の諸語を続けるのである。

以上、半丁四面分の改修にすぎないが、なぜ二巻本のままではいけなかったのかとの疑問もある。気まぐれに三巻にしたのではなく、そうせざるをえない状況があったものと、当時の節用集界での動きを察知すべき事例かもしれない。横本『二体節用集』が三巻であって、元和・寛永期に開版・再版されて盛行をみたため、真草二行体の節用集は三巻構成をとるという通念が醸成されたのかもしれない。その余波は寛永一五年以降たびたび刊行される『真草二行節用集』や頭書増補本にも及ぶほどの根強いものであった。このような状況であれば、寛永一二年本として再版する

さいにも三巻構成をとらずには済まされなかったものと思われる。(2)

寛永年間本　イ～カ部しか残らないのは残念で、せめて寛永一二年本で中巻に配されたソ部まであれば、その原拠を寛永六年本か一二年本かに特定できるところである。亀田次郎の識語には「寛永年間而も十年以前の出板とおもはる又其巻数も内容及小口書入より考ふるに乾坤二巻四冊なりしが如し」とある。寛永一〇年以前の刊行とするのは内題書名が「節用集」と単称であることもあずかろう。なお、本書では寛永六年本での不体裁を正そうとしており、特に見やすさが考慮されている。真字（楷書体）の大小が一行内で一定しないこともあるが、それが気にならないほど行草書の見栄えがよい。中心線は安定し、小さめにまとまる書体にも統一感がある。さらに、行草表記と真字表記の境界罫を廃したのも簡明な紙面を印象づける。(3) ただ、境界罫のないものは『真草二行節用集』慶安三（一六五〇）年刊本から増えるかと思うが、本書の見栄えのよさも、実は寛永期よりも新しい時代の刊行を示すのかもしれない。

本文にも手を加えた部分があって、相応に改編意欲が認められる本となっている。一方、ハ乾坤の「白駒〔日名〕一昼一日」の「一日」の同字符終筆を寛永六年本同様左上方にはねるなど、愚直になぞる面もある。また、書体のまとまりとは別に、行草体の崩し方自体はよく似ており、この点からも関係のありようがうかがわれる。

寿閑本系の確認

寛永六年本類の諸本が寿閑本の本文を引きつぐことをいくつかの点から確認しておこう。

カ言語の乱丁的誤刻の修訂　易林本の言語（辞）門では二字語（複数字語）から一字語へと配列する原則があるが、カ言語では一丁分の一字語（「干戈」を含む）が、二字語の「嘉祝～按摩」の前丁に配される（上田・橋本）。丁付けは逆転しないので原稿段階からの誤りであろう。これを草書本が踏襲し、源太郎本・『二体節用集』・寛永七年本・『真草二行節用集』等に引きつがれた。ところが寿閑本では原則通りに復元している。復元といってもカ言語内のことであって改める必要がないともいえるので、この改修が見られることが寿閑本系の指標になろう。

寛永六年本類諸本は改修された配列順を採っており、寿閑本系であることが知られる。なお、寛永年間本では配列順の異なる部分があるが、他の部・門でも見られる小異なので特に異とする必要はない。

ヲ言語三〇語の誤脱　寿閑本は、易林本から派生するさいに「21追様～50没在」（数字は易林本のヲ言語での配列順）の諸語を採らなかった。これほど大量の語を一括して採らないことは他にないので寿閑本の編集方針によるのではなく、以下のようにして発生した誤脱なのであろう。寿閑本の上巻二四丁裏六行めの末近くに「20一（越）年」があるが、この直下には二字語「21追様」を収めきれないため一字語「51行」を埋め草として先行させたのであろう。次行行頭からは本来の「21追様」以下が配されるはずだったが、うっかり「52後」以下を続けたのではなかろうか。(4) このような事故ならば偶然の一致は考えにくいから寿閑本系の指標としてよいかと思う。

この誤脱は寛永六年本類諸本に共通して見られる。ただし、寛永年間本では、当該三〇語のうち二七語がヲ言語末尾に存する。(5) 柏原（一九七七）も指摘するように、誤脱に気づいた編者が補ったと見るべきものであろう。ヲ言語末という位置もそれを支持しよう。もちろん、補充に際して参照されたのは易林本か草書本系諸本ということになる。

増補語の共通　語の削除・増補も本文の独自性を構成するので、その有無が本文系統の指標になりうる。どちらが指標としてふさわしいかといえば増補であろう。同じ語が同じ位置にないことも指標になりえようが、同じ語が同じ位置に新たに加わることの方がより起きにくい事態・変化であるから、指標としてより適しているのである。

寿閑本では、易林本の内容自体を別物にしようとする意図は小さかったと推されるが（佐藤二〇〇八）、それでも以下のような語が増補されている。(6)

イ言辞：一縮　一紀　一周忌　一落索　ロ乾坤：陸地　陋菴　楼爐　ロ言語：論訴　漏失　ハ乾坤：伴道所　垣

生小屋　白露　葉月　壮　白　百鬼夜行　泊瀬　放生会　ハ人倫：房官　祝　ハ数量：八宗　ハ言語：傍輩　博労　鉢叩　働　硲　ニ数量：二十一代集　ル器財：蘆鴈画　ル言語：被　遭　セ人倫：ー（聖）代

慶長一六年本・寛永六年本類ではほぼすべての語が見られるが、「論訴・漏失・ー（聖）代」は寛永六年本・一二年本になく、「泊瀬」は寛永六年本類に、「博労」は寛永年間本に見えない。なお寛永年間本での「ー（聖）代」の有無は欠巻のため不明である。また、本稿では基本的には寛永六年本・一二年本のいずれかから寛永年間本が派生したと想定するが、「論訴・漏失」のように前二者にない語を寛永年間本が載せる例があるので、より複雑な関係を考える必要があろう。また、それがロ言語だけのことなのか、全体におよぶのかは、今後見極めるべき課題である。

配列順の異同　最後に配列順から検討する。まずハ乾坤を採りあげる。易林本の配列は次のようである。

1白駒　2白昼　3白日　4彗星　5八荒　6八専　7八朔　8晩春　9晩夏　10晩景　11晩天　12瀑布　13麦秋　14梅月　15晩秋　16晩冬　17初霜　18初雪　19暴風　20斑霜　21春　22涯　23百済　24坂東　25走井　26墓　27馬場　28磐石　29橋　30梁　31階　32圃　33畠　34浜　35原　36法堂　37坊舎　38坊跡　39坊中　40破風　41八風　42鰭板　43欄額　44櫺檻　45柱　46楹　47馬櫪神　48拝殿

これに、寿閑本では次の九語を増補する。以下の検討の都合により易林本からの通し番号を与えておく。

49伴道所　50垣生小屋　51白露　52葉月　53壮　54白　55百鬼夜行　56泊瀬　57放生会

諸本の配列順は次の通りである。慶長一六年本は寿閑本と、寛永一二年本は六年本と同一であった。

寿閑本　1～5　7　6　41　8～11　15～18　13　14　19　20　23～25　27　28　36～40　42～44　47～53　12　54～57　21　22　26　29～35　45　46

寛永六年本　1～5　7　6　41　8～11　15～18　13　14　19　20　23～25　27　28　36～40　42～44　47～53　12　54　55　57　21　22　26　29～35　45　46

寛永年間本　1～5　7　6　41　8～11　15～18　13　14　19　21　23～25　27　28　36～40　42～44　47～50　32　33　51～54　26　12　55　57　21　22　29～31　34　35　45　46

右の諸本では、寿閑本で変えられた配列をよく伝えている。「56泊瀬」の削除が寛永六年本と寛永年間本とで共通し、後者ではさらに配列が変わるので、基本的に寛永年間本は寛永六年本（一二年本）の改編本とみてよかろう。

本文後半部の例としてシ乾坤をとりあげる。易林本での配列順は次のようだが、「29甚」は頭字のみを並み字で示すもので、その字を用いる熟字は割行表示するのである。いま、そうした語にも通し番号を付し、割行表示であることを角括弧で示す。なお、寛永年間本はイ～カだけの零本なのでシ部は検討できない。

1須弥四州　2瀟湘八景　3娑婆　4磁石山　5震旦　6敷島　7紫震殿　8清涼殿　9社頭　10精舎　11寺社　12昭堂　13祠堂　14鐘楼　15書院　16浄地　17四壁　18蹴鞠坪　19四至　20芝居　21所領　22私領　23社壇　24舎宅　25城郭　26寝殿　27深雪〔28ー山〕29甚〔30ー風　31ー雨〕32蔀　33檫　34咫尺　35庄　36小便処　37死出山〔38四手山〕39神楽　40神泉苑　41白山　42新羅　43日域　44浄刹〔45ー土〕46清水〔47妙美水〕48塩干　49赭堂　50新造　51主殿　52塩屋　53室間　54食堂　55障子　56鹿垣　57柴庵〔58ー戸〕59敷板〔60ー居〕61委文　62城　63嶋　64嶼　65堊

諸本の配列順は次のようである。慶長一六年本は寿閑本と、寛永一二年本は寛永六年本と同一である。増補はなく、削除も寛永六年本の「12昭堂」だけである。「29甚」がないのは割行表示を解消したための発展的な消滅である。

寿閑本　1　2　41　3～15　18　17　16　19　20　25　21～24　26～28　32　30　31　33～36　65　37〔38〕～40　42～48　52　49～51　53～64

寛永六年本　1　5　2　41　3　4　6～11　13～15　18　17　16　19～22　25　23　24　26～〔28〕32　30　31　33～36　65　37〔38〕～40　42～〔45〕　47　46　48〔52〕45　49～51　53～〔58〕～64

ハ乾坤より若干見づらいが、それでも「16浄地・18蹴鞠坪・25城郭・32蔀・41白山・52塩屋・65堊」などの移動が共通しており、寛永六年本の本文が寿閑本系であることが知られるのである。

系統の交雑

右のシ乾坤の例で気になるのは、寿閑本で原則廃された割行表示が寛永六年本で復活することである。紙面の効率を考えてのことだろうが、それにしては並み字表示の「45浄土」と割行表示の「ー（浄）土」が重出するのは不審である。[7] 重出の理由について、柏原（一九七七）は行末などへの埋め草として先行させた語を元の位置から消去せずにしまうことを挙げる。一般論としてはそれも考えられるが、ここでは重出した語の表示法に注目し、割行表示を廃した寿閑本系と割行表示をする草書本系という二種の本文を追いつつ編集した可能性を考えてみたい。

その手がかりに同字符の使用状態をみておこう。ル言語における、頭字を「流」字とする熟字を例にとる。[8]

易林本　〔言語〕流通　流布　流浪　流転　流例　流刑　流罪／
草書本　〔言語〕流布／流通　ー浪　ー転　ー例　ー刑　ー罪
源太郎本　〔言語〕流布　流通／流浪　ー転　ー例　ー刑／ー罪
寿閑本　〔言語〕被／遭　流通　ー布　ー浪　ー転　ー例　ー刑　ー罪
寛永六年本〔言語〕被／遭　流布　流通　流浪　ー転　ー例　ー刑　ー罪／
寛永年間本〔言語〕被　遭／流布　流通　流浪　ー転　ー例　ー刑　ー罪

易林本の配列は、草書本では「流通」が下げられ、源太郎本もこれを引きついだ。同字符は、易林本のみ用いないが、通常二語め以降の熟字に用いられ、草書本・源太郎本のように改行直後で改めて頭字を記すこともある。[9] なお、源太郎本の「流通」は同字符を用いないが、依拠した草書本にひきずられたのであろう。寿閑本では易林本の語順を引きつぎつつ「被・遭」二語を増補する。寛永六年本もこの二語を引きつぐが、それ以下の配列順は引きつがず、「流通・流浪」は行頭でもないのに頭字を記すなど寿閑本系らしくない。が、これは「流布」以下を源太郎本のごとき本文から流用したと見れば容易に了解されるのであって、交雑を示す例となろう。なお、寛永年間本は、改行以外は寛永六年と同一で、同字符の使用原則が守られない点まで引きついでおり、関係の深さを反映するものと思われる。

チ言語における「長」を頭字とする諸語もみてみる。他種の語の介入や移動があって見づらいので、例示に際しては空白を挿入して語の位置をそろえた。もとより原本にそうした長大な空きはない。

易林本　聴聞　聴衆　長生楽／長久　長途　長座　長短　長遠　竹簡／長命　長時
草書本　聴聞　ー衆　長生楽　ー久　ー途　ー座　／長短　ー遠　ー命　ー時
源太郎本　聴聞　ー衆　長久　／長生楽　ー途　ー座　遠／長短　ー遠　ー命　ー時／
寿閑本　聴聞　ー衆　長時　／長久　ー途　ー座　ー短　ー遠　ー命　ー生楽
寛永六年本　／聴聞　ー衆　ー時　長久　ー途　ー座　長短　ー遠　／ー命　長生楽
寛永年間本　聴聞　ー衆／ー時　長久　ー途　ー座　長短　ー遠　ー命　長生楽／

寛永六年本の配列順は寿閑本と同じだが、同字符の用法は異なる。「長短」では同字符を用いてよく、「長生楽」は行頭の「ー命」すら同字符なのだから使うべきところである。三語めの「ー時」は「聴時」の意味になるが、本来は「長時」なのだから同字符を使ってはならないところである。こうした不可解としか言えない混乱は、源太郎本の同字符の用法を機械的に当てはめれば実現することが知られる。寿閑本系の配列順を引きつぎつつ、表記のみ源太郎本などに依ったわけで、草書本系との交雑の証左としてよかろう。なお、寛永年間本はここでも寛永六年本を踏襲し、不可解な部分もそのまま引きついでおり、関係の深さを物語る。

別の面からみてみよう。寿閑本・慶長一六年本では原則として見出しを割行表示しない。しかし、寛永六年本ではヤ部以降で積極的に用いており、易林本ないし草書本系の本文ににかよう。ことに右の検討結果からは源太郎本など

の横本との交渉が疑われた。そこで、割行表示のありように注目し、横本との関係をさらに検討してみよう。

源太郎本では、「無」を頭字とする熟字を、割行表示をまじえて三行にわたって記す。横線が改行箇所である。

無礼 ―ー道ー性ー頼ー骨ー為ー事ー沙汰ー器用ー人数 ―ー所存ー興隆
―ー功ー徳ー興ー力ー勢ー人ー音ー覚悟ー故実 ―ー案内ー双

寛永六年本は縦本なので一行に収めるが、本来なら改行前後の語を「ー人数ー功……ー故実ー所存ー興隆ー案内」と並べなおすべきを、三行めの諸語を機械的に二行めの直下に配するのである。[10] ちょうど右の例示の横線を取り去った形になる。いかにも即物的だが、その位置、つまり「ー人数・ー所存」間と「ー故実・ー案内」間には空白がよこたわる。他の箇所では同字符による語の切れ目が明瞭なので空白を設けないから余計に目立つが、これは、透き写しの紙を動かしたり、版下紙に切り貼りするなどしたおりに、位置合わせが甘くなったことを示すものであろう。

割注でも同様の例がある。次例では消し忘れた「所」字が機械的な一行化の痕跡となった。

源太郎本　王昭君漢元帝宮女又云 ―所
明妃為画工毛延寿 ―悪

寛永六年本　王昭君漢元帝宮女又云 所
明妃為画工毛延寿所悪

このような例を見れば、語の重出をはじめ書体の不整一・中心線のぶれ・不用意な空白といった寛永六年本の不整備の数々も、複製技法の濫用によるかと思われるのである。もちろん、各事例ごとの丁寧な検証が必須であるが。

以上、寛永六年本は、寿閑本系本文を根幹としながらも、草書本系横本からの摂取がさまざまな形態・レベルで見られることが知られたが、では、なにゆえ摂取・交渉が必要だったのだろうか。推測するに、寛永六年本では一面五行としたことから、慶長一六年本の一面四行から縮約しようとの改編意図があったのであろう。であれば草書本系横本は実に魅力的であった。割行表示見出しが多いだけでなく、源太郎本では行草一行表示で一面九行を、『二体節用集』では真草二行で一面六行化をも果たし縮約に成功していたからである。ただ一方では、源太郎本以下の諸本は、紙数削減策とともに収載語数も草書本比で約三割が削除されてもいること（高梨一九九二）に注意を要する。

こうしたことがらを総合すれば、寛永六年本における改編とは、寿閑本系の収載語数を維持したまま、紙数節減をはかるために草書本系横本を参照・借用することだったと思われる。もちろん、改編の実際なり細部なりについては齟齬をきたす部分もあろうが、基本的にはそのように認めておいてよかろう。

おわりに

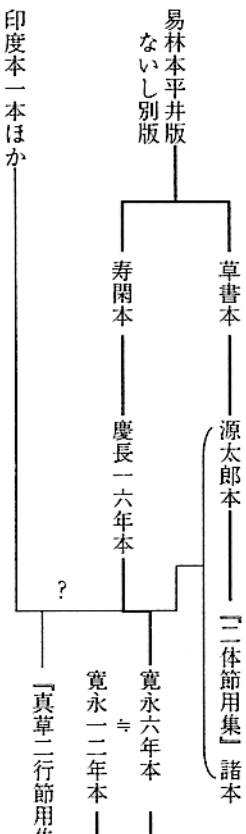
寛永六年本の成立について右のような見通しが得られたが、今後考察を確かなものにするには、透き写し・切り貼りなどの個々の例については物理的なレベルでの検証が欠かせない。その際、寿閑本系は慶長一六年本に依ってよかろうが、草書本系の横本は、本稿では仮に源太郎本で代表させたが、諸本のなかから一本を（必然があれば複数本を）特定する必要もあろう。また、物理的に突き合わせるといっても、どのような方法が有効なのか少々考えあぐねる部分もある。識者の御教示をあおぎたく思う。

寛永六年本については寿閑本系らしからぬものとして、その価値を小さく見積もりがちだったかもしれない。が、慶長一六年本の縮約をこころみた点は評価されようし、二系統の本文を駆使したことは相応に創意にあふれたものとして、場合によっては画期的な試みとして再評価すべきなのかもしれない。もちろん、とても本稿だけでそうした価値付けにはいたらない。後日の詳細な検討が必要である。

寿閑本系本文のさらなる継承も検討事項である。たとえば『真草二行節用集』寛文二（一六六二）年刊本などは印度本などからの増補が示唆されるが（上田・橋本、菊田紀郎一九七二）、その骨格となった近世節用集の本文は、草書本系の「寛永十五年本系ではなく、改めて検討が必要」（柏原一九七七）という。一七世紀後半の増補傾向をさきどり

した本だけに、草書本横本以降の諸本よりも、語数の豊かな寿閑本系がかかわる可能性もなしとしない。

最後に、今後の見通しをまとめる意味で諸本の関係を図示してみる。柏原（一九七七）・高梨（一九九二）も参照したが、概略を示すために共通想定本も設けなかった。もとより、的確な検証により正すべきは正し、精度をあげる必要がある。



注（1）　寛永六年本には慶長一六年本同様、上巻末にイロハ・門名一覧の陰刻があり、両本の関係がかいまみられる。寛永一二年本では巻頭の「部分之名」とイロハ一覧として再生したと見られようか。ただし、「部分之名」は寛永九年刊本『二体節用集』などにならったものか、各門の説明がそなわる。

（2）　柏原（一九七七）も『二体節用集』の模倣とするが、寛永六年本は未見なので、二巻本のまま再版できた可能性は考慮されていない。寛永六年二巻本の存在があって改めて三巻構成化に事態としての重みが生じるのである。

（3）　この種の罫が消された理由は見やすさを求めてのことではないかもしれない。楷書一行の易林本や行草一行の草書本・寿閑本になく、真草二行の慶長一六年本から認められるが、慶長一六年本は行草部分を寿閑本から透き写したと見られるので（佐藤二〇〇八）、罫線は、真字分の紙面を残しながら透き写す際の目印になったかと思う。ならば、この罫の有無が透き写しの有無に対応するのかもしれず、寛永年間本では透き写しがなかったことを示すか。

（4）　以前、各語が「訓読み熟字なので前後の要素を別個に検索すれば事足りると考え、故意に削除したものか」とも考えたが（佐藤二〇〇八）、これは正確には欠いたままでもよしとした理由ということになろうか。

（5）　末尾に補われた二七語が複数字語（多く二字語）なので、複数字語から単字語へと配列される原則に破調をきたすこととなった。このあたりに編者の質ないし見識が現れているのかもしれないが、いまその評価にまでは立ち入らない。寛永年間本も寿閑本系の本文を基調とすること、それを一部修訂したことを確認できればよい。

（6）　易林本以外の古本節用集には採られるものなので、系統を考える上で参考にもなる。なお、「八代集」のように寿閑本にない語が慶長一六年本で増補される例もあるが、いまは考慮しない。ちなみに「八代集」の増補は応急的であるらしく、「八苦」の長大な割注のため、真字が記されなかった行になされる。この語は元来、易林本にあるのを寿閑本が採らなかったものなので、この語の増補は慶長一六年本段階で易林本・草書本との交渉を示すのかもしれない。もちろん、基本的な語なので系統を云々する指標にはなりにくい面もある。

（7）　柏原（一九七七）によれば、寛永六年本は他にも重出が多く、寛永前期の縦本では最多という。

（8）　以下の挙例では、慶長一六年本は寿閑本と、『二体節用集』の元和頃版・寛永六年版は源太郎と同内容である。易林本は静嘉堂文庫本、源太郎本は岩崎文庫本、寿閑本は米谷隆史・佐藤蔵本、『二体節用集』の寛永六年本は亀田文庫本、草書本と『二体節用集』の元和・寛永頃版は架蔵書による。

（9）　ここに示した範囲の本文での原則であり、他の箇所では必ずしもそうなってはいない。他の本も同様である。

（10）　柏原（一九七三）でもミ言辞における「見」を頭字とする熟字により指摘する。

参考文献

上田万年・橋本進吉（一九一六）『古本節用集の研究』東京帝国大学（勉誠社復刻　一九六八）
柏原司郎（一九七三）「近世初期『節用集（横本）』の改板例（上）」『野州国文学』一二
柏原司郎（一九七七）「縮刷本節用集の性格について」『浅野信博士古稀記念国語学論叢』桜楓社
菊田紀郎（一九七二）「寛文五年版節用集「乾坤」門の増補語彙」『国語学研究』一一
佐藤貴裕（二〇〇八）「寿閑本節用集の意義――慶長刊行節用集の記述のために――」『日本語の研究』四―一
高梨信博（一九八四）「草書本節用集について――易林本節用集との比較を中心に――」『国文学研究』八三
高梨信博（一九九二）「近世前期の節用集」『〔辻村敏樹教授古稀記念〕日本語史の諸問題』明治書院
高梨信博（一九九六）「『真草二行節用集』諸版の本文と性格」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』（第三）四二

鳥居フミ子・酒井わか奈編（一九九六）『東京女子大学所蔵近世芸文集』ぺりかん社
和田恭幸（二〇〇一）「近世初期刊本考」。冨士昭雄編『江戸文学と出版メディア』笠間書院

補記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（A）「日本における書物・出版と社会変容」（一橋大学大学院・若尾政希）、同（C）「近世辞書の学際的・言語生活史的研究のための基礎研究」（佐藤貴裕）の成果の一部である。